

## がん予防・検診研究センターにおけるがん発見数と予測数に関する比較検討（16-81）

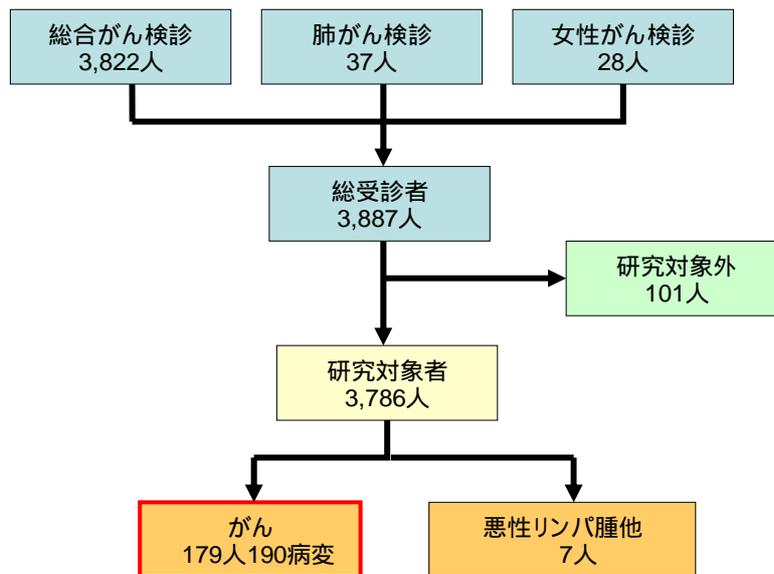
2006.9.4.公表 2006.9.28 更新

がん予防・検診研究センターで1年間に実際に発見されたがんと、簡易モデルにより予測される発見数の比較検討を行いました。当センターにおける検診は、通常精密検査として用いられる方法を採用しています。このため、多くの早期がんを発見することができますが、この中には生命に影響のないがんが含まれている可能性があります。過剰診断は、どのようながん検診にも必ずありうることです。そこで、検診受診者の過去1年以内の受診歴を考慮した上で、対象集団で発見されると考えられる予測値を簡易モデルにより推計し、実際の発見癌数と比較検討しました。この結果を専門誌で論文発表しましたので、ここに概要を紹介します（Japanese Journal of Clinical Oncology 2006年第36巻第5号）

### がん予防・検診研究センターにおけるがん発見数

2004年2月から2005年1月まで、3887人ががん予防・検診研究センターのがん検診を受診しましたが、一定の条件を満たした研究対象者は3786人（男性2061人、女性1725人）でした。このうち、男性からは119人（5.8%）、女性からは71人（4.1%）のがんが発見されました。男性では胃がんが最も多く、女性では肺がんが最も多く発見されました。

### 検診受診者と研究対象



### がん発見数の予測

検診受診者にどのくらいのがんを見つけることが可能かを推定するためには、年齢や性別によるがんの罹患数（新たにがんになる人の数）が必要です。この数値は、一部の地域で行われているがん登録に基づき、全国のがん罹患の推計値が公表されています。

検診を初めて受ける場合と、これまで受けたことのある場合とでは、がんの発見率が異なります。がんは、症状が出る以前の段階でも、がん検診によって発見可能な時期が限定されます。この時間を滞在時間といいます。これは、がんの種類や検査法によっても異なります。滞在時間については諸外国でこれまでいくつかの研究が行われています。

がん検診の方法は、臓器により異なり、精度も異なります。がんである人が、真にがんであるということを判断する精度を感度といいます。この感度について、わが国でも、また諸外国においても、多くの研究があります。

様々な受診パターンを考慮した簡易モデルを作成し、さらに、様々な研究から得られたデータを利用し、がん予防・検診研究センターで発見しうるがんの数を予測しました。

予測値に比べて、男性では胃がんが 1.8 倍、前立腺がんが 3.4 倍と、実際の発見数が上回っています。一方、女性では、肺がんが 7.6 倍、乳がんが 2.4 倍、予測値より多くのがんが発見されています。

### がん発見数と予測数の比較

がん検診	男性			女性			
	発見数	予測数	発見数 / 予測数	発見数	予測数	発見数 / 予測数	
胃がん	内視鏡	28	15.31	1.83	7	3.69	1.90
大腸がん	大腸X線	4	2.25	1.78	4	1.08	3.70
	内視鏡	26	21.90	1.19	15	7.64	1.96
肺がん	CT	14	10.86	1.29	18	2.38	7.56
前立腺がん	PSA	24	7.00	3.43	-	-	-
乳がん	マンモグ	-	-	-	15	6.22	2.41
	ラファイ	-	-	-	-	-	-
	+超音波 +視触診	-	-	-	-	-	-

がん予防・検診研究センターでは、予測を上回る多くのがんが発見されています。がん発見率が高いということは、本当に検診として効果があるのでしょうか。実は、がん発見率が高いというだけで、検診の効果があるとはいえません。むしろ、害がある可能性があります。がん検診で多くの早期がんを発見すると、この中には生命に影響のないがんが含まれている可能性があるからです。これらのがんは、本来生命予後にはなんら問題がないとしても、検診で見つかった場合には、精密検査や治療を受けることになります。精密検査や治療を受けることで、様々な偶発症の可能性が高くなります。たとえば、前立腺がん検診では、血液検査により、小さながんが見つかる可能性があります。こうしたがんを積極的に手術することで、術後の後遺症として尿失禁やインポテンツなど、術後の後遺症が増加していることが報告されています。

ただし、現在の医療では、早期のがんについて、どのがんが進行し、生命予後に影響を与えるか、またどのようながんであれば様子を見て、積極的な治療をしなくてよいのかわかりません。ただし、こうした過剰診断は、どのようながん検診にもあり、検診の種類によっては無視できない場合もあります。

検診を受診する場合には、検診には早期発見・早期治療による効果があるとともに、不利益もあります。検診を受ける前には、こうした不利益についても説明を受け、本当に受診する価値があるかどうかを、考える必要があります。